

大杉栄とベルグソン(下)

三 浦 精 一

社会の中の人間と人間の中の社会

『道徳と宗教の二源泉』は、「禁断の果実の想い出は、人類全体の記憶のうちでも、最も古いものである」という書き出しで始まる。生れて、物心ついて、いろいろ、両親や、兄や姉、その他の愛につつまれて生長して、私共は多種多様な禁止にぶつかることを知るのだが、すでに歩行し、行動するようになれば、そこでもまた色々な禁止にとりまかれる。言葉も知らない赤ん坊の内から、社会生活は禁止をもって始まっている。未開人の社会では、こうした禁止がタブーとして、宗教と強く結びつき、終生恐ろしい神の怒りをなだめ、災厄をまぬかれるために呪文をとえながら生きる人々がいる。

禁断の果実の物語は、聖書の天地創造神話に続く人間創造の神話で語られるもので、今では日本人もよく知っていることだが、「エデンの園に住むアダムとエヴァに、神はただ一つ、園の中で知恵の木の実を食べてはならないという禁制をあたえた。蛇がエヴァにす

ずめてこの木の実を食わせ、エヴァはこれをアダムに与えた。二人はエデンを追放された」という神話である。キリスト教が行きわたっているヨーロッパでは、旧教でも新教でも、この話を聞かずに育つ子供は無いだろうし、ヨーロッパ人の記憶には古いものである。しかし日本では、百年にもならない輸入品で、普及度も低い。

聖書をそのまま信じるという人々には、この神話は現実のものであり、この人類の始祖の違反から、原罪についても訳なく納得する。しかし、文明開化の開明思想とともに、受取った日本人には単なる神話としてぼんやり記憶している方が多いだろう。だが、赤ん坊のときから、種々様々な禁止の中で生長することを考えたら、こうした神話でできた古い時代から、人間の社会生活には禁止があったことを肯定するだろうし、ベルグソンの書き出しの意味も、大体わかるだろう。社会生活は禁断をもって始まると言っても、間違ではない。禁断するもの、それは一体何なのか。原始には神の律法だった。そして神を信ずる者には今でも神の律法である。信じない者の世界にも禁断がある。道徳と呼ばれ、法律もその規定をもってい

る。泣いても、笑っても、嘲笑しても、無視しても、怒って見たところで、社会的慣習と一緒にしたこの道徳は、私たちの生れない前から社会を支配し、その社会の中に私共は長くもたった百年しか生きていない。それは私共の外にあると同時に内にもあるものである。

ベルグソンは、私たちがこうした禁断に従ったのはなぜか、どうして両親や先生たちの言うとおりに従う習慣ができたのかと問うのである。両親や先生たちも、これに従って生活して来た。人間全体を包含し、その背後にあって命令するのは何か。それは「社会」ではないか。しかるに「報償と刑罰を正しく計量する秤がどこにあるのか」と言わねばならないように、実に漠然とした、大まかな規制で、しかも強要される。

「われわれ各人は、自分だけに眼を向けているときには当然、自分の好尚や欲望に従いがい、また心のおもむくままに振舞ってよく、他人のことなど眼中におかなくともよいと感じている。だがそういう気持が起るが早いのか、たちまちこれに反対する力が立ち現われてくる」。そして責務を感じ、必然のようにこれにしたがう。この場合、これは必ずしも外からの強制とは言えない。ベルグソンは、ここに社会化された自我がある、と言う。「理論上は、どこまでも他人に対してだとしても、実際には、われわれは自分自身に対しても責務を負っている。ただし社会の連帯性なるものは、われわれ各自のうちで、社会的自我が個人的自我につけ加わってくるまでは、存在していないからである」。

動物の二大進化路線の一方の先端に膜翅類があり、他方の先端には人間の社会があるというのは、ベルグソンが度々言うことであ

る。この膜翅類の蟻や蜂の社会は、一定の型に金縛りになっていて、人間の社会は可変的である。前者では責務は本能の形で、なんの抵抗もなく遂行されるが、後者では習慣的に、半ば無意識的な面が多いにせよ、知性はその責務をはたす。そして意志の上に大きくのしかかって、責務の一つ一つが他を曳きずって、大きな集塊となって圧力をかけている。こうして責務の全体が単純な、基本的な、生命現象一般に結びついて、必然的なものになっている。

人間が生活する社会、人間が投げ出されてそこで生きている社会は、こうした構造をもっている。デュルケムは実証的に、社会の構造を探究し、ベルグソンはそうした実証的な科学に立って人間の内面から社会を考へる。動物の本能に相当するものは、人間が知性的に構築した習慣的なもの、宗教的なものとしてのしかかってくる。知性がそこに沈澱させた必然であるが故に、若い知性が反発しようとする。クロボトキンがロシアのニヒリストが、「カントが至上

命令だと言ったから、私自身の存在の深みから来て、私に道徳的であるように要請するから、私は、道徳的でなければならぬのか：川に落ちて溺れる者を救えば、溺れるのを見ているよりも幸福になれると信じさせようとするベンタムにしたがって道徳的になるのか。それとも教育を受けたからか、母が道徳を教えたからか……私は偏見をつめこまれてるんだ……偏見を捨てよう。不道徳はにがいものであっても、私は私に不道徳を強制するんだ。子供のときに暗黒や教会や幽霊や、死人を恐れることをやめるように私自身に強制したときのように」といったことを書いているが、何故道徳的でなければならぬかという疑問は必ず起ってくる。そして、クロボトキンは、「これがロシアの青年が、旧世界の偏見を破り、ニヒリ

ストというよりもアナリスットの旗をなびかせたと推論したことであつた。尊敬されているにしても、いかなる権威にも膝をかがめず、理性によって認められない限り、いかなる原則も受入れないというのである」と言い、こうした点から「何故道徳的でなければならぬか」について答えようとする。

そしてクロボトキンが動物についての観察から、あらゆる動物を通じて法則として言えることは、「同じ境遇において、他のものにしてもらいたいと思うことを、他の者に対して行なえ」であると言う。人間についても、この原則は勿論適用される。キリスト教やその他でしばしばこの原則はおのれの欲せざる所を人にほどこすなと、否定的に表現されているが、彼がこれを肯定的に表現したとことと、われわれの生活において、無意識的な生活が四分の三を占めていると言った点は注目すべきものである。そして平等を強調したのは勿論だが、ギェイヨウの言葉によって、「各人がその生活において感じてきた義務についての道徳的感情は、あらゆる神秘主義によつて説明を企てられたものであるが、溢れ出る生命以外のものではない。この生命は、実行すること、自らをあたえることを要求する。同時にそれは力の意識である」と至つて積極的である。そして最後に、英国学派の利他的感情や利己的感情の対立を否定し、「諸君の周囲に生命の種をまけ、嘘を言い、いつわり、陰謀し、欺くことは、諸君を低劣にするものだ」と知れ……たかえ、すべての者が、あふれる生命を生きたりすることができるよう……選択は諸君の自由だ」と結ぶ。

クロボトキンの「無政府主義者の道徳」を読むとき、ベルグソンに非常に近いものを見出す。四分の三は無意識的に行われると、面

白い表現でクロボトキンが言うとき、ベルグソンは、習慣的に半ば無意識な面が多い、と言う。これは単なる言葉の上のことだが、クロボトキンも、ベルグソンも、同じ生物学の結論にもとづき、クロボトキンは常識的に、ベルグソンは哲学的に書いているのである。カントは、人間理性にとつて、最も切実な問題として、「私は何を知り得るか」、「私は何をなすべきか」、「何を望み得るか」の三つをあげており、この中の「何をなすべきか」について、ある倫理学者は、何をなすかと言っても、多くのことは日常習慣的に行われていて、いかに決断し、いかに行動し、いかなる結果を負わねばならないかは、日常的な現実的事態によつて要求されるが、現実的状况に指示を求めるときはできない。しかもわれわれは生活の一步一步において自らこれに解答しなければならぬ。そしてこれが解決を通して現実を一步超える。この現実的状况に対するわれわれには、内的道徳的立場から考えれば、何の必然性もなく、また他人の指導強制もない、したがって自己より外に頼るべき何ものもなく、独力で決断するでなければならぬ。その結果について責任を負うのは個人である、といった意味のことを言っているが、ここには社会が無い、社会を考へない訳ではないが、強く自己を考へるのはスチルナーの生きかたでもある。

犯人が証拠を抹消して、自分を過去から断絶しようとするとき、その彼を追放するのは彼の罪の意識で、彼は全く孤独になり、社会からの断絶を感じると、ベルグソンは言う。良心の判決は社会的自我の下す判決であり、この犯罪者の今の自己は、犯罪以前の自己とは違うのである。疎外された自己である。道徳的な苦悶は社会的自我と個人的自我との関係の錯乱である。社会的な復帰のためには罪

の告白が要求される。

孤島でロビンソン・クルーソーは、心ならずも社会から隔絶されてしまった。しかし彼は難破船から、人間の手によってつくられた品物を、いくつとなく拾い上げた。こうした品物はロビンソンを文明の圏内、社会の圏内につなぎとめるものであり、彼が以前に生活した社会から受けた精神的なものは、そのまま彼の中に生きていく。彼はこの心の中の社会から、生のエネルギーをくみとって生活する。一人になった彼も社会からさきえられて生きていたのである。彼は社会から持って来た精神的なものにしたがって責務をはたしながら生きた。生命現象一般と結びついた必然的な、責務をである。

「論者がどのような哲学を抱懐している」と、人間もまた生物の一種だということ、また生命進化は二つの主要な線上で、社会的生命の方向へ行われたということ——この二点は認めぬ訳には行かない。そして生命が有機的組織である以上は、社会結合が生命活動の最も一般的な形態だということ——これも認めざるを得まい。そして、このことが認められたら、責務についてのすべての理論は不必要、かつ無力なものになってしまう、とベルグソンは言うのである。

この責務を中心に、これにもとづいて生ずる道徳的感情、そして形成される社会的な道徳観念を考えると、われわれはそれが単に、倫理の問題であるばかりでなく、精神的秩序、社会的秩序の問題として、哲学上、社会学上の考究を要するものであることが分る。

コントを継いで社会学の基礎をすえたデュルケムは、すべての先

日本人の中には、ことに若い人たちの中には道徳無視の傾向が強い。これは日本の社会が強い権力組織を持ち、この権力を頂点として縦軸的な社会組織を形成して来たためにあまりにも否定すべきものが多いからであると思われる。孔孟の教を御用学問とした徳川時代の唯一の反抗は西鶴や近松の人情物だった。安藤昌益の思想も庶民的になるほど一般化しなかった。庶民は庶民の人情をもって儒教に対するほかにはプロテストはできなかった。庶民の中にはいつでも反権力の感情があり、官製道徳へのプロテストがあったと思われる。若い魂が反逆するとき、いつでも既製道徳無視の傾向をもつのは世界中どこでも同じではある。しかし日本では明治以後、既製道徳に対する西洋道徳の輸入、それと共に西洋の反抗的思想も入って渦を巻いて混沌状態が起り、代るべきものへの思考も迷路に行き迷う情態だった。大杉が新しい道徳について言っても黙殺されたと思われる。

今、われわれに一番大切なことは、社会の中の人間と人間の中の社会を考えることであると思われる。そしてこの社会の中のわれわれは人類の一人である。われわれが人類であることを知らねばならない。

静的宗教と動的宗教

動物は宗教をもっていないのに、理性的存在者である人間だけがそれを持っている。しかるに「さまざまな宗教の過去を見わたし、またあいつも変らぬ宗教の現状を眺めるとき、その光景たるや、人間知性にとって、まことにこれにまさる不面目はない。なんたる迷妄の織りなした組織であろう。△それは間違っている▽と、どんなに

天的概念をすてて事物に対して観察者としての態度をとり、社会的諸事実を事物としてあつかった。しかしこの社会的事実の本質的に精神的秩序の性質をもつものであると考えている。この社会的事実には彼においては個人的意識の外部に存在する集合意識で、拘束力をもつ思惟、行為、感得の様式である。この拘束力として道徳を考え、宗教からも一切の形而上学的な要素を剝奪して、世俗的道徳を確立しようとした。

デュルケムの弟子レヴィ・ブリュルはベルグソンの親友だったと言われているが、師の立場をさらに進めて、従来の理論的道徳学に対して習俗学として実証的な道徳学を確立しようところをみた。

こうした社会学的な方向に対して、その成果に立脚しながら、その科学的、実証論的な決定論を批判して、人間の生を中心に展開したのがベルグソンの哲学的態度であった。社会を考えるときに必ずその中心問題となるのが道徳であるということは動かすことのできないことで、クロポトキンも、無政府主義者の道徳を書いたばかりでなく、その白鳥の歌が未完成の倫理学であった。エリゼ・ルクリュについてバクレーニンが、「彼は無神論者であってしかも宗教的聖者である」と言ったとき、バクレーニンの心の中に構成されている道徳的な基準が考えられる。ルクリュもクロポトキンもロマン・ロランに「虫も殺せないやさしい心の持主」と言わせた人々だった。

大杉は「サンジカリズムは言う。社会主義は定命の生成ではない。任意的組成である。労働者が優越なる精神的教化の程度に達せざる限り社会主義の経済的変革は実現せられない。新しき道徳は現在の社会の中につくらねばならぬのだ。そしてこの新道徳の力が、新しい社会状態を可能ならしめるのだ」と言っている。

経験が言ってみても、また△それは不合理だ▽と、どれほど理性が言っても、なんの効果もない。人類はこの不合理と迷妄とに、かかっていつそうしがみつくばかりである。だが、宗教がここでとどまるのならまだしもよい。こともあろうに、宗教が不道徳を命じ、犯罪を強制させるのが見られる。宗教は、それが粗末なものであればあるほど、それだけいつそう、ある社会の民衆生活のうちで、実質上大きな力をふるっている。」これは静的宗教である。

人間の知性は正道を歩んでいる場合も、そうでない場合も、その方向は、ともかく、ひたすら直進するものであり、このために人間の社会性を破壊にみちびくし、反省的であることから、死の自覚、生の不安、生活意欲の喪失といったこともおこる。このために、知性的存在であるはずの人間の社会に、意想外という外ない「恐ろしく低級な迷信が、地上いたるところでこれほどにも長い間行われてきた」という事実を知るとき、われわれの驚きはいつそう大きくなる。そうした迷信は、今日も決して無くなった訳ではない。科学も、芸術も、哲学も持たぬ人間社会なら、過去にいくらかあったし、それは今日でも見出されよう。しかし宗教を持たぬ社会はかつてあったためしはない。さてこの点で人間を動物と比較して見るとき、われわれのおぼえる困惑は、なんたるものであろう。動物が迷信を知らぬことは、まず間違いない。われわれのとは違った意識のうちで、どういふことが起っているか、それはわからぬ。だが普通、宗教心がある状態というものは、態度や行為となつて外に現われるものだから、動物にわずかでも宗教心があり得るのなら、それはなんらかの徴候によって、そうとわかるはずである。とすれば、われわれは、はらをきめて、次のように言うほかはない。――

禁じ得なかつたであろう。大杉はこうした民衆の強さを知っていた。「正気の狂人」の中で、「ここに一ストライキが起るとする。

僕はこのストライキをもつて、ベルグソンのいわゆる八われわれがある重大な決心をなすべく選んだわれわれの生涯の一瞬間、その類において唯一なる瞬間としたいのだ」と言っているが、その頃のストライキは今のような日常茶飯事ではなく、官憲の激しい弾圧に抗してのものだった。大杉はストライキの中に革命的瞬間を見たのだった。弾圧また弾圧と、打続く迫害をたえ忍ぶドウハボル教徒として生きることも、その信徒になることも、重大な一つの決意に全生命をかけることだった。大杉の時代にアナルシストになることも、こうした一瞬を持つことだった。今後においてもこの正気の狂人の一瞬をせまられる日は来るはずだ。

動的宗教については、今まで述べたことである程度想像できたであろうと思うが、さらにベルグソンの言葉を引用しながら、はっきりとした概念をとらえることにしよう。

ベルグソンはコントが、社会の条件として「秩序」と「進歩」をあげたことについて、「このうち昆虫の欲したのは秩序だけだったのに対して、人間種族のうち少くともある部分が目指しているのは進歩であり、この進歩たるや秩序を犠牲にすることさえ辞さぬもので、いずれにせよ個人の創意に負うものである」と言う。宗教は人間生活における社会秩序の維持と、生の意欲の確保の手段として、人間によって受継がれて来た。それは生命の自衛のためで、同じ円周の上をぐるぐるまわるといった保守的な傾向をもち、目的論的な機械論的な、決定論的な傾向も持っていた。しかし生命の進化には常に偶然的な、予見できないものがあり、常に自己を創造する。一

われが完全な神秘主義と呼ぶものの特徴をなすものなのである」と語る。ベルグソンは非常に宗教的になっている。

釈迦はこうした不安にたえられなくなって王宮を出た。観照の幾十年を乞食として過ごして、彼が残した教えは万巻の書となっていた。彼の跡にしたがう教団の一つに禅宗がある。最近ゆくりなく聞いたラジオ放送で、名前も忘れたが一禅僧の話が耳に残った。それは彼が沢木老師と呼ぶ、生涯寺を持たなかった一人の禅師に師侍したとき、こうして二十年、三十年とあなたにつかえて坐禅をしたら、何かものになるでしようかと聞いたとき、師は即座に、ならぬ、わしも昔と変わってはいない、と答えられた。二、三十年師につかえ師を見送って、今考えて見れば、矢張り師の言葉の通りだ、と言っているのである。そして今壇家一軒すらない寺に住職として托鉢の日を送っているが、托鉢に行つて寺の名を聞かれても格式ある大寺ではないので、十円のお布施も一円になる。だからと言って差別待遇絶対反対というわけにもいかない、と語る。ここに人間の真実が語られていると思う。坐禅は自我を見つめる修業であらうし、大悟徹底という華々しい言葉も、平凡な民衆の一人である自己を知ることであり、鈴木大拙が書いた禅の入門書のように奴隸的薬隠武士道によって説明されることではなく、仏教教団の管長となって権力を振うことでもないだろう。親鸞が寺院宗教に反逆したことが、むしろ禅的なだろう。私はここに東洋の神秘主義の一つを見ることがベルグソンも語る解脫である。

西洋の神秘主義は、こうした行き方と似た点もあるが、また違った点もある。浄土宗や真宗では一つの神格が採用されているが、仏教においては「神」が無い。そこにあるのは衆生である人間だけ

系的に進化するのではなくて爆發し、四散し八散しながら進化してゆく。静的宗教の中で、昔話で寝かしつけられていた子供も、目ざめて起き上り、活動をはじめめる。停滞は一時である。創造的エランはその根源にかえって、ふたたび躍進をはじめめる。

閉じた社会の静的宗教、部族の、民族の、国家の宗教から人類の宗教、動的宗教への躍動である。ここにベルグソンは、「神秘主義」という言葉を用いる。神秘主義という言葉は西洋では日本よりもっと一般化した言葉である。これは「知性だけでやれる仕事ではない。知性が進んでゆく方向はむしろ逆の方向である。知性には知性の特殊な使命がある。その思惟が高度のものになった場合でも、知性はせいぜいもろの可能性を考えさせるだけであり、ものの現実そのものにはついに触れることがない。しかしわれわれは、漠然とした、ほとんど消えかかったものではあっても、知性をとりまいて直覚が縁筆となつて残っていることを知っている。われわれはこの縁筆を固定し、わけても行動へまでも完成することはできないか」と言う。私共は前にベルグソンが「直観」を説いたことを想起する。これは純粹に持続する生命、意識、精神、自我を内観し、把握することであった。そしてこれは否定の操作でもあった。私がこうしてベルグソンを読みながら思い浮べるのはトルストイや釈迦である。

ベルグソンは、真の神秘主義は自然が妥協せねばならなかった幾多の障害を突破すると言ひ、また「生は、自らは近づきえぬあるものを、しかも大神秘家がそこへ達しているあるものを求めていたと見るほかない」と言う。そして神秘家の魂は、あるとき「漠然と不安を覚える。そしてまさにこの静安のうちで立ち騒ぐ心こそ、われだ。人間をそして人生を突きつめて、空とか、無とか、無常とかいう言葉で到達した境地を表現するが、キリスト教には「神」が存在する。神の前に無に等しい自己を見出す。そして真実の人間のあり方を、神秘的な啓示の形で示される。そして聖フランシスや、聖テレジアなどの行き方が、人間の到達すべきあり方を先取するものとして、民衆の中にも認識される。狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが人の子は枕する所もないと言つたキリストに従がおうとした聖人たちも、すべてをすてて托鉢によって生活した。東も西も、「神」があるか無いかという違いはあつても、行き方は似ている。物質欲を幸福の手段とし、物質に幸福を見出そうとする者に、無一物の、裸の幸福を示している。

ベルグソンはエランの根源にさかのぼつてこの動的宗教の神秘主義という言葉で、エラン・ダムール(愛の躍動)を語っている。そして「哲学で論じられている神は、普通一般の人々が神と信じているものとはほとんど無縁と言つてもよい。だから奇蹟が起り、また哲学者の思いに反して、このように定義された神が、経験の野に降りて来たとしても、その神を神と気づける人は、ただの一人もあるまい」と、ベルグソンが語るとき、彼はどんな神を考えているのだろうか。「神は愛である。そして愛の対象である」と、彼は言うのだが、これ以上のことは言わない。キリストの再臨を信じる民衆の中の再臨のキリストは審判者であり権力者であり、ユダヤ教の審判の神である。もしこうした信者の期待に反して宿無しのキリストが出現したら、信者たちも一度十字架を負わせるだろう。愛の神は審判しないし、権力を持ちほしない。

トルストイは、「神とは、私にとつては、私の追い求めるもの――

追い求めるがゆえに私の生活を構成し、したがって私にとっては存在するものである。「私は神という言葉をも、より高きもの——正義、善良、他人へのやさしさ、真理等——に関する知識を私の精神に送りこんだものであると解している。私の心の中でこのより高い観念を十分理解して、私は私自身のうちに神の生命を見出し、かつそれによって満足している。このより高い観念が心霊である。私の生活がその心霊なるものの動作および生活となって初めて私は、美しい喜ばしいあるものによってみだされる。そして私の生活の限界を求めることなくして、ただ私と同様に、また他の人々にも住むところのその心霊と、合体することを求めるばかりである。このより高い観念——心霊を自身に体得したらすぐ、それを周囲の人々に明示し、神を伝道する。私が自身の内に、最高なる者すなわち霊を見出す時は、その時はすなわち私は、それによって神を認識する」と言っている。

動的宗教は人間に生きる歓喜をあたえる。生の根源にかえって、創造するよるべきをあたえる。ドウハボル教徒の敗残の姿の中から、天にひびく歓喜の凱歌が上るのを聞かねばならない。アナルシストになることは物欲にしがみつく者たちや権力主義者共に富の平均と、生きる権利を要求することである。アナルシストに歓喜をあたえるのは人類の正義である。

閉じた社会と開いた社会

われわれの文明社会は閉じた社会である。平和とは防衛への、いかなる攻撃への準備状態であり、社会がわれわれに課するのは、敵を前にしての結束である。要するに成員がひたすら戦闘体制を強いら

ている社会である。「自然はわれわれ人間には、ほかならぬ知性を与えた以上、社会組織の型をある程度までは自由に選ぶことを許しているといえよう。だがそれでも、人間が社会をなして生活を営むというこのことは、自然の強制であって、われわれの自由に出たものではない。あたかも物体に対する重力の作用のように、一定方向の力が魂に作用し、個々人の意志を同じ方向へ傾かせて集団の凝集を保証するのである。これがすなわち道徳的責務である。われわれは、この責務は開いて行く社会では払うことも可能だが、しかしともとは閉じた社会のためにできている」と、とベルグソンは、閉じた社会と開いた社会を対立的にとらえている。道徳や宗教についても、閉じた道徳、開いた道徳、静的宗教と動的宗教という風に対立させている。

科学が対象とするのはこの閉じた社会、閉じた道徳の現実である。デュルケムや、レヴィ・ブルジュルは、社会的諸事実を事物として客観的に研究した。こうした科学的な因果的な決定論に反対してベルグソンは、自由を求めた。もちろんベルグソン以前にも、こうした要求から、ラヴェンソンやラシュリエ、ブートルー等の哲学があった。しかしそれは世界の最高目的である神の自由の中に人間の自由を見出そうとする目的論を予想するものであった。神は絶対的に自由なものであっても、われわれの外部にあり、超越者として在る限り人間にとっては拘束的なものである。ベルグソンはこうした世界の外部ではなく、内部に、生命の持続の中に、エランの中に求めて行った。外部からの束縛のない、自由な自我の中にこそ自由は確立される。この自由を得ることこそ解放のよるべきである。この解放された自我が神を語るべき、それはベルグソンの言う哲学者の

神であり、トルストイの神であった。

ティヤール・ド・シャルダンは、「わたしのまわりの宇宙が、全体的に漂流しているという意識が、抽象観念でなく、生きた現実感として、わたしの内面生活の中に侵入するまでに高まった。この頃わたしはベルグソンの『創造的進化』をむさばるように読んだことを思い出す」と語ったという。カトリックの神父として終生忠実に職務を果たし、蒙古に旅行して考古学に大きな寄与をしたティヤールは、宇宙を理解する手がかりとして、人間を、全人的に理解しようとした。パスカルの言うように、人間は一本の草にすぎないにしても、その思考の中に宇宙を抱擁し、人間の運命を、そして宇宙の運命を考える。過去、現在、未来を通じての人間の運命を、持続する現実の中で考える。人は皆草である。草は枯れ、花はしぼむ、と聖書は語る。このはかない草が考える。考える自由、行動する自由を持つ。閉じた社会に生きる一本の草の自由を、何の拘束も受けない真実の自由としてベルグソンは追及した。その哲学がティヤールを歓喜させた。

閉じたものから、開いたものへ、静的宗教から動的宗教へ、真の自由を得た魂は、開いた社会、開いた道徳、動的宗教を認識し、そこへの推移を考える。自由が自己満足だったら別だが、家族、部族、国家への拡大は閉じたものの内部でのことで、征服被征服の血なまぐさい過程の確立のための道徳、宗教の権力との妥協が行われる。閉じた社会から開いた社会、人類の社会への距離はどれほどあるのだろうか。有限と無限の差ではないか。

「閉じた社会から開いた社会へ、また市邦から人類へは、拡大の道によって絶対に移れない。この両種の社会は本質が違っている。

る。開いた社会とは、原理上、全人類を包含するような社会である。また他の所では、「われわれは一躍人類のかたへ移されるのではなくてはならぬ」と言う。こうした移行を可能にするのは、人間の魂の根本的な革新である。このような根本的革新ということが果して可能なのだろうか。ベルグソンが「神秘主義」について語ったのは、こうした一部の個人たちにだけしか、開かれた社会は入れないという意味なのか。それとも、こうした人々と共に新しく生れる可能性があるということなのか。しかし「人類は自分を変えざるを得ず、変わるものではない。だが思うに、人類は自らを革新する手だてを、すでに手に入れているのだ。もしかすれば、人類は自分で想像している以上に目標に近づいているかも知れない」と言っているところを見れば、民主制、戦争、産業などで、むしろ問い問題を説明してはいても、彼自身がこうした希望に生きていると思われる。

「私は、歴史の宿命的決定性を信じない。時機を失せずに着手すれば、十分にひき緊った意志によって粉砕できぬような障害はない。つまり抵抗を許さぬ歴史の鉄則などというものも存在しない。だが、生物学の法則は厳として存在する。そして人間社会も、一面自然の意図したものである限り、この限定された点では生物学の領分にはいる」。歴史の鉄則は無い。弁証法的発展の必然などと言うのは神話に過ぎない。ベルグソンの哲学は生の哲学、自由の哲学である。こうした宿命的な信仰を打破って、開かれた社会への可能性を切り開いて行く。しかし生物としての人間の上には生物としての法則を認めねばならない。静的宗教には信仰によって生物学の法則も越えられないことを説く者もある。大戦の時、神国日本を強調し

て、神風を待ったように。

ベルグソンは、生物としての生命の進化の一系的でない進化をも一度説明し、「行為は前進しつつ、みずからその進歩を創ってゆくのであり、またこの行為が遂行される諸条件をも大部分新たに創ってゆくのであって、およそ計算というものを寄せつけないからである。かくして、われわれは前方へどこまでも突き進み、たいいていの場合破局が目前に迫らぬ限りは停らない」。破局が来てもとまらぬこともある。「ある一つの方向が何をもちし得るかは、この方向をとことんまで進んでみないことには分らない」。こうした人間の悲しい傾向は、産業にも文明の上にも現われる。利欲や娯楽やを中心にして、食料や人口の問題をよそに、機械化に進む。こうしたことを二分法などを提案して人間の現実の動きを説明しようとする。精神の上の宿命は排するが、生物学的宿命をどうすることもできないベルグソンの悲哀がここにある。生物ベルグソンならば弁証法的必然に屈しても良いだろうが、少くとも自由を求めるベルグソンは持続する生命の不屈の魂を知っている。そしてこの道徳と宗教の二源泉を、「人類の将来が、一にかかって人類自身にあることが、充分に自覚されていない。まず、今後とも生き続ける意志があるのかどうか、それを確める責任は人類にある」と言い、さらに、人類はまた「ただ生きていくだけでよいのか、それとも、その上にさらに、神々を生み出す機関とも言うべき、宇宙本来の職分が——言うことを聞かぬこの地球上においても——成就されるために必要な努力を惜しまぬ意志があるのかどうか、それを問うのも、ほかならぬ人類の責任なのである」と結ぶ。

生きなければならぬ。しかし迷信によって、静的宗教によつ

て、弁証法的必然によって生きようとすることは、人類の死である。開かれた社会は、個の革命、そして社会の革命によってしか到達できない。

(四四ページよりつづく)

第四に、機械文明の拒否があげられる。ライヒは、「動物は人間から区別されるが、機械ではないし、加虐的性格をもたない。同族で構成される動物社会は、人間社会と比べものにならないほど平和的である。その場合の根本的な疑問は、動物的な人間を、機械と同程度まで退化させた真因はなんなのか、ということになる」と問い、その答えを、「わたしは動物ではない。わたしは機械を発明した。わたしは動物のように性的存在ではない」とする「動物性」と

「性欲」の抑圧の歴史のうちに求めている。

このように、ライヒが残した遺産は、たんに臨床上の技法にとどまるものではない。いまここにあげた四つの問題だけでも、それぞれきわめて本質的な、根本的な問いかけをそのなかに内包していることは、明らかである。彼が、四面楚歌の逆境のなかで、荒削りに提出した問題を仕上げていく責任は、ほかならぬ、われわれの肩にかかっているのである。